

○やごめつきうた——こちらの種子まきやよい日にまけた、アードッコイショ、ないのひだちもさぞよから、アードッコイショ——種子もみを俵のまま池に十五日位つけておき、四月二十日過ぎのよい天気るときあげて水洗し、四斗だるに入れ、さんだらで蓋をしておき、日向にむけておく。半月位たつと芽が出る。これを蒔く。残りをふかし、いってから二斗臼に入れてチヨロケン（杵の一種）で若衆が半日位つく。焼米つきうたはこの時にうたう。この日を「たねまき正月」という。つき終るとごちそうになる。帰りは夜になるが昼間話をつけておいた女とつれだつてゆき、ボサにころがした。女もそれを承知でついていった。

○津久井のつび十夜——宝蔵院の十夜のこと。とてもにぎわった。この夜はそれと目ぼしをつけた女をさそつて浜やボサにつれこんでころがした。その夜は女もそれを承知で来たもんだ。弁当などが少量すぎて食いたりないとき「津久井のつび十夜だ」という言葉がある。何処に入ったかわからないの意だそうだ。

○つび地蔵——南下浦町金田の円福寺の本尊地蔵は十年に一度開帳する。八月二十三日。俗に「つび地蔵」とよんだ。この日は遠近から参詣者がすこぶる多く、夜までにぎわったが、この夜行われた風習によって「つび地蔵」の名を得たもので、隣接村から若衆が多くでかけた。（その風習——相手かまわずこの夜は野合が行われたものだ。明治二五年頃はまだ盛だったが次第にすたれた。それでも昭和の初頃までは少しあったそうだ。）

○津久井の浜せがき——宝蔵院の浜せがきとも呼ぶ。寺の前浜で八月二十四日夜せがきが行われ船から燈ろうを流すのを浜に多勢集まって見物した。この夜も相手かまわずの野合が行われたので有名だったそうだ。

○西の風とひょうとり（日やとい）は日一ばい。

○こじよはん——おやつのこと——にはあわのこわめし、あわの水もちが出された。

○毘沙門の人達はけちで有名だった。その馬鹿ばやしも有名だが、「むこ」は三年間たいこかつぎをさせられたものだ。

○松輪の「あげあなかんじょう」……南下浦町松輪。「あげあな」とは畑の周に竹根が侵入せぬよう深く掘った穴のこと。松輪は漁場で男は漁に出てしまうから畑は女がやっていた。長井・初声方面の二、三男がひょうとり（目傭）にやとわれて畑を耕作にいらした。やとい主の女にさそわれて畑の隅のあげあなで野合することが多かった。その場合、それと差引されて銭をもらえなかつたので、それを「松輪のあげあなかんじょう」と呼んだそうだ。明治中頃には「四日一両」といって四日働いて一両の賃銭だった。それで「四日一両でやってくんな」と云つてやとつたという。長井・初声あたりの二、三男で嫁ももらえず、むこにも行けぬ者は、松輪へ出かけて常時やとわれていた。これを「松輪おんじ」とい、
「あげあなかんじょう」を承知で行っていた。

○三崎の女は各地で茶屋女になっているのが多かった。

○三崎は漁師が漁のないとき、釜まで質に入れ、数軒で一つの釜しかないとあつた。ぼろ布を風呂敷包にして、中を見ないで幾らか貸してくれといつて借りることさえあつた。

○初声から三崎へ肥料をとりに行つたが、その時はそだ二把を桶の上のせて行き、肥料一荷とそだ二把と交換に汲んで来た。三崎は燃料が少いから。

○ねやど——若衆が夜遊びしておそくなると泊る共同の宿があつた。「ねやど」と呼び、大正頃まであつた。北下浦・津久井・高円坊にもあつた。

○巨人伝説——長沢本行寺わきの池に巨人伝説がある。昔巨人が房州へ渡ろうとして和田から一またぎで長沢に片足をふんだ。その足あとが本行寺わきの池である。巨人は房州へ渡つて行つたが抱えていた石を落していった。その石が長沢下の海にある三磯である。

○やごめつきうた——「やごめとちくらんでつくのはいやだし、ついてくわせるよなかほしや」「ぼんどのぼんのくどにぼっちゃりげがなけりや、さほどしよかるさせよかろ」

○みずらい(みっともない)

○ひるま(ひるめし)

○ぶんのくど(額)

○農家の女が耕作時に着る作業衣を「うでぬき」という。縦縞の布を用い、腕は極めて細く作る。腕の部分は「めくらじま」(黒色)の布を用いた。そで口はこはぜでとめる。畠の場合は前かけをしめるだけだが、水田の場合は腰をはしよつて半巾帯をしめ、「田ももひき」をはき、前かけを短くしてしめる。田ももひきもめくらじままで足にびたりする細いものである。

○内川新田あたりではぐみ、ねこやなぎ、ねずみやなぎなどを庭に挿木するものでないといわれている。これらの木はうめき声を聞きたがる木だから病人がたえないという。